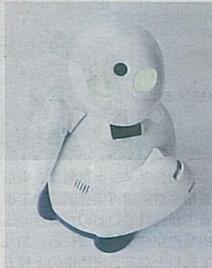


遠隔操作ロボ「オリヒメ」 難病者、ビジネス向けに進化

視線入力、一時離席機能など搭載

ロボット開発ベンチャー、オリイ研究所のロボット「OriHime（オリヒメ）」がこの1年で大きな進化を遂げている。難病者向けに操作性を向上させた機種、ビジネス用途に特化した機種を相次いで投入。遠く離れた家族や友人と同じ空間を共有したいというニーズに応えている。

2015年7月に登場したOriHimeは「存在感の伝達」をコンセプトとした遠隔操作ロボット。高さは21.5センチ、幅は約15センチ、奥行き約23センチで重さは約500グラム。頭部にカメラとマイク、胸部にスピーカーが内蔵されており、うなずいたり、腕を動かしながらコミュニケーション



オリイ研究所が開発した小型分身ロボット「OriHime」（同社提供）

側索硬化症などの難病患者でも介助者なしに簡単に操作できるようにした。新バージョンはすでに100台を生産し、レンタル用として提供している。また来年7月までに500台の製造を計画している。

16年7月に投入したOriHimeの新バージョンは、視線入力装置に対応した「OriHime eye ソフトウェア」を搭載した。発声のできないALS（筋委縮性

想定している。実際にNTT東日本では、子育て中の社員が在宅勤務時にこのロボットを使って、オフィスにいる社員と共同で日々の業務にあたっている。

もともと体が弱かったため、10代前半を不登校で過ごした吉藤健太郎社長。「1週間も誰とも話さない日が続くと、本当に言葉や笑い方を忘れてしまう」と話す。高校在学中に新機種の「傾かない、倒れない車椅子」を開発するなど、ものづくりへの強い関心があった。その後、人工知能（AI）の研究に取り組み、「孤独による不安や寂しさを解消するにはやはりロボットしかない」と考え、オリイ

研究所を立ち上げた。

今年4月、独立系ベンチャーキャピタル（VC）のピヨンド・ネクスト・ベンチャーズ（東京都千代田区）が運用するファンド（基金）と、起業支援のリバネス（同新宿区）などによるファンド、8人の個人投資家を引受先とする第三者割当増資を実施し、2億2977万円を調達した。

OriHimeはスマートフォンや携帯情報端末からインターネット経由で動かすが、吉藤社長は「パソコンなしでも動かせるような一体型など、利用シーンに合わせた新型機の開発に力を入れたい」としている。

■会社概要

▷ 本社＝東京都三鷹市下連雀3-3-50 パークファミリア 501
▷ 設立＝2012年9月28日

▷ 資本金＝1億3982万円

▷ 従業員＝7人

▷ 事業内容＝コミュニケーションロボット「OriHime（オリヒメ）」の開発販売